

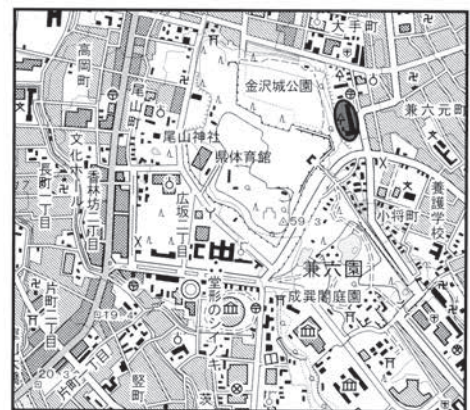
金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）出土の鳥類遺体について

江田真毅（北海道大学総合博物館）・山川史子（石川県埋蔵文化財センター駐在）

はじめに

金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）は、金沢城跡の北東側を区画する白鳥堀に面した金沢城下町の遺跡である。金沢地方裁判所などの建て替えに伴う調査のため、調査区は金沢市丸の内7番地の、裁判所庁舎敷地内である。寛永8（1631）年の大火以前には、調査区周辺に町人地が広がり、区画溝や道路、導水施設などが確認された。寛永8年以降は町屋と武家屋敷が存在し、武家屋敷の庭園に作られた池が「心字池」へと拡大し、城の石垣を転用した景石や滝、石積み護岸などが整備される。寛永12（1635）年の大火以後は武家屋敷地や加賀藩の公事場へと変化した。

調査区の多くは屋敷地の庭園にあたり、苑地遺構、水溜状遺構からの出土品が多く、江戸時代前期に利用された動物遺体が池状遺構やその周辺の土坑から出土した。貝類はイワガキを含むイタボガキ科、コタマガイ、アカニシ、サザエ、ヤマトシジミなどの食用の他、イシガイ類（ドブガイ）、イトマキボラ科、魚類にはマダイが見られた。同定した畑山智史によると、マダイはカットマークなどの観察から、「カブト割り」で調理したことがわかる。哺乳類ではニホンジカ、テン、ツキノワグマ？、イヌが出土した。イヌは2015年刊行の報告書で古環境研究所により同定、報告されている。イヌ以外の哺乳類と鳥類は山川が同定などを担当したが、3点出土した鳥類については十分な現生標本との比較ができていなかったため、小論ではその再検討をおこなった。



遺跡位置図 (S=1/25,000)

資料と方法

金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）で出土した鳥類遺体は3点である。2014年発行の発掘調査報告書・第2分冊（555頁）でNo.2-3としたものが今回の作業番号1、No.2-9が2、No.2-11が3である。資料はすべて発掘調査中に視認され、ピックアップ採取されたものである。資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として、北海道大学総合博物館の収蔵資料（HOUMVC）および江田（EP）の所蔵標本を利用した。骨の部位の名称はBaumel et al（1993）および日本獣医解剖学会（1998）に、分類群名は基本的に日本鳥学会（2012）に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科や族の分類はAmerican Ornithologist' Union（1998）に従った。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、骨髓骨様の交織骨の有無、解体痕と加工痕の記載を試みた。

結 果

分析対象とした3点中2点で目以下を単位とした同定ができた(表)。確認された分類群はガン族とトキ科である。1は2014年の報告ではカモ科としたが、再検討の結果、ガン族の可能性を残すものの同定不能と結論した。2と3は2014年の報告でそれぞれカモ科と種不明としていたが、今回の再検討ではそれぞれトキ科、ガン族と同定できた。トキ科と同定した2は標本のトキ(HOUMVC-30076)とほぼ同大の左上腕骨であった(第2図)。一方、ガン族と同定した3は現生標本のマガン(EP-25)とほぼ同大の右上腕骨であった。いずれの資料も骨幹の平滑な成鳥のものであり、骨髓骨は含まれていなかった。また、解体痕や加工痕は認められなかった。

考 察

本稿では、金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)出土の鳥類遺体を再検討した。その結果、資料中にガン族とトキ科が含まれることが明らかになった。ガン族の資料は、比較標本として利用したマガンのほか、その大きさからハクガンやサカツラガンのものである可能性が考えられる。ガン族の骨は江戸の加賀藩藩邸であった本郷遺跡を含む江戸時代の遺跡から頻繁に出土している(新美2008、江田2017)。当時の金沢においても同様に利用されていたことが窺える。

トキ科の資料は、栄養孔の位置や尾側面の筋線の発達状況も比較したトキの標本と極めてよく一致していた。さらに日本に生息する他のトキ科の上腕骨はより細く短いことから、出土資料はトキのもので可能性が高い。トキは江戸時代の初期には北海道、東北、関東および北陸地方などに分布しており、その後幕府や諸藩が禁猟区を設け、積極的に移入し繁殖させたことにより近畿、中国、四国、九州にも生息地が広がったことが知られている(樋口ら1996)。これまでのところ本郷遺跡からはトキ科の骨は報告されておらず、また江戸時代の遺跡を見渡してもトキ科の骨の出土は稀である(新美2008)。管見の限り、トキ科の骨の出土は水野原遺跡(阿部・江田2008)や千代田区一丁目遺跡(山根2015)、四谷一丁目遺跡(江田・許2020)などに限られる。元禄10(1697)年に人見必大によって編纂された『本朝食鑑』によれば、トキの肉は煮ると脂肪が紅玉のように浮かぶため食べるものは少なく、鎌倉時代に書かれた『古今著聞集』にはトキの羽を矢羽に用いた話があることが記されている。食用だけでなく羽の利用があった可能性も指摘できる。

石川県の遺跡から出土した鳥の骨は例数も少なく、江戸時代あるいはそれ以前の時代における鳥類の利用については不明な点が多い。本稿で扱った金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)出土の鳥骨は3点と少数ではあるものの、石川県下で初めて確認されたトキ科の骨など、貴重な資料であると言えるだろう。

参考・引用文献

- 阿部常樹・江田真毅 2008 「水野原遺跡2次調査出土の動物遺体」テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部『東京都水野原遺跡Ⅱ－連携複合施設(仮称)新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告－』 学校法人東京女子医科大学・学校法人早稲田大学・テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部 187-207頁
- 江田真毅 2017 「加賀藩前田家本郷邸内における鳥類利用の時間的・空間的変遷—溶姫御殿に着目して—」『江戸藩邸と国元・金沢の近世食文化—動物考古学の研究成果から—』 東京大学埋蔵文化財調査室編、東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会 45-52頁
- 江田真毅・許開軒 2020 「四谷一丁目遺跡(6次調査)出土の鳥類遺体」『四谷一丁目遺跡(第3分冊)』東京都埋蔵文化財センター編 116-124頁

(公財) 石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2014 『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）Ⅰ』
 (公財) 石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2015 『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）Ⅱ』
 人見必大（訳注：島田勇雄）1977 『本朝食鑑2』 平凡社（ワイド版東洋文庫）
 新美倫子 2008 「鳥と日本人」西本豊弘編『人と動物の日本史Ⅰ 動物の考古学』 吉川弘文館 226-252頁
 日本獣医解剖学会 1998 『家禽解剖学用語』 日本中央競馬会
 日本鳥学会2012『日本鳥類目録改訂 第7版』 日本鳥学会
 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲編1996『日本動物大百科 3鳥類Ⅰ』 平凡社
 山根洋子 2015 「有楽町一丁目遺跡出土の鳥類・哺乳類遺体」 株式会社武蔵文化財研究所編 『東京都千代田区 有楽町一丁目遺跡』 三井不動産株式会社・株式会社武蔵文化財研究所 379-381頁
 American Ornithologist' Union. 1998. The AOU Check-list of North American Birds, 7th Edition,
 American Ornithologist' Union, Washington, D.C.
 Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., Berge, J.C.V. 1993. Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium, Nuttall Ornithological Club, Cambridge.



第1図 出土した鳥類



第2図 トキ科現生標本との比較

番号	報告書番号	小分類	部位	左右	部分	調査区	面	遺構
1	2-3	同定不能	上腕骨	右	骨体部破片	5区南07・ウ、エ	1面	SX146-a 上層
2	2-9	トキ科	上腕骨	左	骨体部	3区北J5・イ	3面	SG115-a
3	2-11	ガン族	上腕骨	右	骨体部破片	6区西（北）H5・イ	4面	遺構検出

表 金沢城下町遺跡（丸の内7番地点地区）出土の鳥類